

イギリスのうつろいとよみがえる思い出

商学部 教授 井口知栄 いぐちちえ

2018年8月からイギリスのレディング大学に2年間滞在する機会を頂き、バークシャー州レディング市に滞在している。レディング大学は博士課程まで学んだ母校であり、レディング市に約8年間住んでいたのも、郷愁を覚えるのではないかと思っていたが、実際に滞在してみると、当時との変化が少ないからなのか、研究で悩んだことや寒い時期に本のコピーを何時間もしたことなど色々と苦しかったことばかりがよみがえってきた。

2つ目の修士課程のためにレディング大学大学院経済学研究所に入学した1998年当時、大学には国際経営論分野の潮流だったレディング学派を構築した現役教授陣が集まっていた。20年も経つので教授陣の顔ぶれは変化しているが、国際経営論で大英帝国勲章を受章された現役の先生方がおられる点は変わらない。キャンパスに入るとラグビー場がある景色や、図書館や学生食堂の雰囲気なども全く変わらない。

時代のうつろいを感じる点は、大学院の科目の履修者数の増加と多国籍化、試験時間の短時間化であろう。例えば現在、「多国籍企業論」には約30名の履修者がおり、「国際経営戦略論」には約140名が履修している。20年前のイギリスの学部進学率も低かった記憶があるが、大学院進学はさらに特別なことで、各科目の履修者は5〜10名程度の少人数であり、先生との距離もかなり近かったことが印象に残っている。大学院進学者の増加と共に、クラス内の多国籍化も進んでいるようで、ヨーロッパ国籍が2割ほど、中南米、アフリカ大陸、南アジア国籍などが2割ほど、残りの6割強がアジア国籍である。かつては試験時間が長いことが有名で、中間試験は2時間で2問、最終試験は3時間で3問を解くという論文式試験であり、途中の空腹対策として机の上にバナナなどの食べ物を置くことが許されていた。近年では中間試験は2時間で2問、最終試験では2時間で2問を解答する。最終試験が3時間から2時間に減ったことに驚いたが、1時間に1本の論文を書く形式の試験問題は今でも変わらず、20年経っても変わらないこともまだ見つけたりするのである。



留学先のレディング大学

談話室

教員によるエッセイコーナー